

(鲁迅作品日文版) PDF转换可能丢失图片或格式 , 建议阅读原文

https://www.100test.com/kao_ti2020/245/2021_2022__E8_96_AC_EF_BC_88_E9_B2_81_E8_c105_245727.htm — あか) るい月は日の出前に落ちて、寝静まった街の上に (あいがめ) のような空が残った。老栓 (かるうせん) はひょっくり起きてマッチを擦り、油じんだ (とうさん) に火を移した。青白い光は茶の中の二 (ふたま) にちた。「お父さん、これから行って下さるんだね」と年寄った女の声が出た。そのときの小部屋の中で咳嗽 (せき) の声が出た。「うむ」老栓はえて上衣 (うわぎ) の (ぼたん) を嵌 (は) めながら手を伸ばし「お前、あれをお出いな」大 (かたいま) は枕の下をさぐって一包 (つつみ) のを取り出し、老栓に手渡すと、老栓はガタガタ (ふる) えて衣套 (かくし) の中にめ、著物 (きもの) の上からそっとでおろしてみた。そこで彼は提灯 (ちょうちん) に火を移し、を吹き消して部屋の方へ行った。部屋の中には苦しそうな (むせ) び声が出まなくいていたが、老栓はその (ひびき) のおさまるのを待って、静かに口をひらいた。「小栓 (しょうせん) 、お前は起きないでいい。店はお母さんがいい按排 (あんばい) にする」「……………」老栓は (せがれ) が落著いて睡 (ねむ) っているものと察し、ようやく安心して口 (かどぐち) を出た。街なかはく沈まり返って何一つない。ただ一条の灰白 (はいじろ) の路 (みち) がぼんやりとえて、提灯の光は彼の二つの脚をてらし、左右の膝が前になり後 (あと) になりして行く。ときどき多くの狗 (いぬ) に遇 (

あ)ったが吠えついて来るものもない。天は室内よりもよほど冷やかで老栓は爽快に感じた。何だか今日は子供の昔にって、神通(じんづう)を得て人の命の本体を掴みにゆくようながして、いているうちにも鹿に高くなってしまった。行けば行くほど路がハッキリして来た。行けば行くほど空が亮るくなって来た。老栓はひたすらみをけているうちにたちまち物にかされた。そこは一条の丁字街(ていじがい)がありありと眼前に横たわっていたのだ。彼はちょっとあとりにある店の下に入った。め切ってあるに靠(もた)れて立っていると、身体が少しひやりとした。「ふん、」「元だね……」老栓は(びっくり)して眼を(みは)った、すぐ鼻の先きを通って行く者があった。その中(うち)の一人は振向いて彼をた。かたちははなはだハッキリしないが、永く物にえた人が食物(たべもの)をつけたように、攫(つか)みって来そうな光がその人の眼から出た。老栓は提灯をいてるともう火が消えていた。念のため衣套をおさえてみるとりはまだそこにあった。老栓は(かしら)をげてをた。味のいい人がつも立っていた。三つ二つ、三つ二つと鬼のような者がそこらじゅうにうろついていた。じっと瞳を据(す)えてもう一度るとに何の不思議もなかった。まもなく人か兵が来た。向うの方にいるから、著物の前と後ろに白いい物がえた。くでもハッキリえたが、近寄って来ると、その白いいものは法被(はっぴ)の上の染めきで、暗色(あんこうしょく)のふちぬいの中にあることを知った。一足音がざくざくして、兵は一大群にまれつつたちまち眼の前をぎ去った。あすこの三つ二つ、三つ

二つは今しも大きなりとなって潮（うしお）のように前に押寄せ、丁字街の口もとまで行くと、突然立ち停まって半状に簇（むら）がった。老栓は注意してると、一群の人はの群れのように、あとから、あとから（くび）を延ばして、さながら形の手が彼等のを引っているようでもあった。静かであった。ふと何か、音がしたようでもあった。すると彼等はたちまちぎ出してがやがやと老栓の立っているまで散らばった。老栓はあぶなく突きばされそうになった。

「さあ、と品物の引えだ」身体じゅう真な人が老栓の前に突立って、その二つの眼玉から（ぬきみ）のようない光を浴びせかけた、老栓はいつもの半分ほどにこまった。その人は老栓の方に大きな手をひろげ、片ッぽの手に赤い（まんじゅう）を撮（つま）んでいたが、赤い汁はの上からぼたぼた落ちていた。老栓は慌ててを突き出しガタガタえていると、その人はじれったがって「なぜ受取らんか、こわいことがあるもんか」と怒った。老栓はなおも躊（ちゅう）ちよ）していると、い人は提灯を引ったくって幌（ほろ）を下げ、その中へをめて老栓の手に渡し、同にを引摺（ひつつか）んで「この老耄（おいぼれ）め」と口の中でぼやきながら立去った。「お前さん、それでの病をなおすんだね」と老栓はかにきかれたようであったが、返辞もしなかった。彼の精神は、今はただ一つの包（パオ）（ ）の上に集って、さながら十世（じっせたんでん）の一人子（ひとりご）を抱（いだ）いているようなものであった。彼は今この包（パオ）の中の新しい生命を彼の家に移し植えて、多くの幸福をめ（え）たいのであった。太も出て来た。彼

のめのまえには一条の大道（だいどう）がわれて、まっすぐに彼の家までいていた。後ろの丁字街の突き当たりには、破れた（へんがく）があって「古（こ）×亭口（ていこう）」の四つの金文字（きんもじ）が煤（すすぐろ）く照らされていた。二老栓はいて我家（わがや）に来た。店の支度はもうちゃんと出来ていた。茶卓は一つ一つ拭きんで、てらてらに光っていたが、客はまだ一人もえなかった。小栓は店の隅の卓子（テブル）に向ってを食っていた。ると（ひたい）の上から大粒の汗がころげ落ち、左右の肩骨が近めつきり高くなって、背中にピタリとついている（あわせ）の上に、八字のが浮（うきもん）のようにび出していた。老栓はのびていた眉宇（まゆがしら）を思わず（しか）めた。大は（かまど）の下から出て来てをわせながら「取れましたか」ときいた。「取れたよ」と老栓は答えた。二人は一にの下へ行って何か相したが、まもなく大は外へ出て一枚ののを持ってかえり卓（テブル）の上に置いた。老栓は提灯の中から赤いを出してのに包んだ。をまして小栓は立上ると大は慌てて声をけ「小栓や、お前はそこに坐（すわ）っておいで。こっちへ来ちゃいけないよ」と吩咐（いいつ）けながらの火を按排した。その（そば）で老栓は一つの青い包（つつみ）と、一つの白の破れ提灯を一にしての中に突むと、赤い（ほのお）がをき起し、一なりが店の方へ流れ出した。「いいいだね。お前は何を食べているんだえ。朝ッぱらから」背（せむし）の五少（ごだんな）が言った。この男は日ここの茶に来て日を暮し、一番早く来て一番くるのだが、このちょうど店の前へ立ち往来

に面した壁のいつもの席に腰をおろした。彼は答うる人がないので「炒り米のお粥かね」とき返してみたが、それでも返辞がない。老栓はいそいそ出て来て、彼にお茶を出した。「小栓、こっちへおいで」と大はを（よ）びんだ。奥ののまんなかにはい腰が一つ置いてあった。小栓はそこへ来て腰をけると母は真（まっくろ）ないものを皿の上へせて出した。「さあお食べ——これを食べると病がなおるよ」このい物を撮み上げた小栓はしばらく眺めている中（うち）に自分の命を持って来たような、いうにいわれぬ奇怪な感じがして、恐る恐る二つに割ってみると、焦げの皮の中から白い（ゆげ）が立ち、が散ってしまうと、半分ずつの白いにいなかった。——それがいつのまにか、残らず肚（はら）の中に入れてしまつて、どんな味がしたのだがまるきり忘れていると、眼の前にただ一枚の空皿（あきざら）が残っているだけで彼の（そば）には父と母が立っていた。二人の眼付（めつき）は皆一に、彼の身体に何物かを注（つ）ぎみ、彼の身体から何物かを取出そうとするらしい。そう思うと抑えき胸ぎがしてまた一しきり咳嗽んだ。

「横になって休んで御。——そうすれば好くなります」小栓は母の言にって咳嗽入（い）りながら睡った。大は彼の咳嗽の静まるのを待って、ツギハギの夜具をそのうえにけた。三店の中には大の客が坐っていた。老栓は忙しそうに大（おおやかん）を提げて一さし、一さし、々のお茶を注（つ）いでいた。彼の方の（まぶた）はいにまれていた。

「老栓、きょうはサツパリ元がないね。病なのかえ」と胡麻ひげの男がきいた。「いいえ」「いいえ？ そうだろう。

にここにこしているからな。いつもとはう」胡麻ひげは自分で自分の言を取消した。「老栓は急がしいのだよ。のためにね……」背の五少がもっと何か言おうとした、じゅう瘤（こぶ）だらけの男がいきなり入って来た。真（まっくろ）の木著物——胸のを脱（はず）して幅のをだらしなく腰のまわりに括（くく）りつけ、入口へ来るとすぐに老栓に向ってどなった。「食べたかね。好くなつたかね。老栓、お前はがいい」老栓は片ッ方の手をにけ、片ッぽの手を恭々（うやうや）しく前に垂れていていた。大もまた眼のふちをくしていたが、このにここにこして茶碗と茶のを持って来て、茶碗の中に橄（かんらん）のを撮みんだ。老栓はすぐにその中にをさした。「あの包（パオ）は上等だ、ほかのものとはう。ねえそうだろう。いうちに持って来て、いうちに食べたからな」と瘤の男は大きな声を出した。「本当にねえ、康（こう）おじさんのおで旨く行きましたよ」大はしんから嬉しそうにお礼を述べた。100Test 下载频道开通，各类考试题目直接下载。详细请访问 www.100test.com